

Title	ボルタンスキーの「原初状態」概念に関する一考察： ブルデューとホネットとの比較を通して
Sub Title	A consideration about Boltanski's Original Position : through comparison with Bourdieu and Honneth
Author	小田切, 祐詞(Odagiri, Yuji)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2014
Jtitle	哲學 No.133 (2014. 3) ,p.167- 199
JaLC DOI	
Abstract	<p>This paper aims to provide an overview of relations between Luc Boltanski, Pierre Bourdieu, and Axel Honneth by examining Boltanski's concept of original position.</p> <p>The concept is characterized by radical uncertainty about the whatness of what is, what matters, and what has value, accompanied by the unease the uncertainty creates. According to his thought experiment, the only solution of the question of what is is to delegate the task of saying the whatness of what is to a bodiless being, that is, an institution.</p> <p>Examining the concept of original position and the trajectory where it has been presented helps us to differentiate Boltanski from Bourdieu and Honneth. From Boltanski's perspective, Bourdieu's sociology is characterized by the emphasis, on the one hand, on power relations and conflict of interests, and, on the other hand, on disposition which tends to disregard the uncertainty in social life. Honneth's theory of 'struggle for recognition' consists of both anti-utilitarianism unlike Bourdieu's theory and intersubjectivity. In contrast to them, Boltanski's sociology, which begins with the above-mentioned uncertainty, is composed of, on the one hand, not starting with conflict of interests like Honneth, and, on the other hand, atomism concerning the meaning.</p>
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000133-0167

てご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ボルタンスキーの「原初状態」

概念に関する一考察

——ブルデューとホネットとの比較を通して——

——小田切 祐 詞*——

**A Consideration about Boltanski's Original Position:
Through Comparison with Bourdieu and Honneth***Yuji Odagiri*

This paper aims to provide an overview of relations between Luc Boltanski, Pierre Bourdieu, and Axel Honneth by examining Boltanski's concept of original position.

The concept is characterized by radical uncertainty about the whatness of what is, what matters, and what has value, accompanied by the unease the uncertainty creates. According to his thought experiment, the only solution of the question of what is is to delegate the task of saying the whatness of what is to a bodiless being, that is, an institution.

Examining the concept of original position and the trajectory where it has been presented helps us to differentiate Boltanski from Bourdieu and Honneth. From Boltanski's perspective, Bourdieu's sociology is characterized by the emphasis, on the one hand, on power relations and conflict of interests, and, on the other hand, on disposition which tends to disregard the uncertainty in social life. Honneth's theory of 'struggle for recognition' consists of both anti-utilitarianism unlike Bourdieu's theory and intersubjectivity. In contrast to them, Boltanski's sociology, which begins with the above-mentioned uncertainty, is composed of, on the one hand, not starting with conflict of interests like Honneth, and, on the other hand, atomism concerning the meaning.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程

1 目 的

近代化の進展に伴い、社会学においてその批判的側面を再考する機運が高まっている。例えば、ジグムント・バウマンは、個人化の進展から、批判理論、さらには社会批判一般の課題が、「公的なるもの」によって侵略される個人の自由や自律を擁護することから、「私的なるもの」による植民地化から公共空間を守ることへと変化したと主張している¹⁾ (Bauman 2001=2008)。また、出口剛司は、アクセル・ホネットの承認論と「資本主義的近代化のパラドックス」概念の検討を通じて、ネオリベリズムと形容されるような形態へと変化した資本主義の批判の可能性について考察している (出口 2010)。これらの例が示しているように、社会学の社会批判的アプローチをどのように刷新していくかが、社会学の今日的課題の一つとして浮上しているように思われる。

本論文は、ホネットが「資本主義的近代化のパラドックス」を定式化する際に依拠していた (Honneth 2010=2012)、リュック・ボルタンスキーを取り上げる。ボルタンスキーは、ピエール・ブルデュー以後のフランス社会学を代表する一人であり、ブルデューからとりわけ批判的側面を受け継ぎ、発展させようとしている。ホネットが参照した『資本主義の新たな精神』は、まさにその一つの成果である²⁾。

ボルタンスキー社会学の検討を通じて、上述の今日的課題に一定の貢献を与えることが本論文の直接的な目的ではない。本論文で行なわれることは、むしろ、その下準備である。すなわち、ボルタンスキー社会学の基本的な理論構成を明らかにすることである。このことを達成するために、本論文は、彼の 2009 年の著作『批判について』の中で議論の出発点として置かれた「原初状態」概念の検討を通じて、ボルタンスキーをブルデューとホネットとの関係性の中に位置づける作業を行っていく。

ボルタンスキー社会学について日本語で書かれた先行研究については、たとえば、『資本主義の新たな精神』を下敷きにしつつ、それを他の社会

理論と関連づけながら、ネオリベリズムのイデオロギー的特徴を分析した櫻村愛子の一連の研究（櫻村 2006）（櫻村 2007）や、『正当化の理論』と『資本主義の新たな精神』の理論的枠組みの概要を説明した三浦直希の研究（三浦 2011）がある。これらの先行研究がボルタンスキー社会学の理論的側面に重点を置いているのに対し、本論文はむしろその学説史的側面に焦点を当てている。もちろん、このことは、本研究が理論的側面に無関心であるということの意味するわけではない。そうではなく、ボルタンスキー社会学の理論的枠組みがどのような布置連関のもとに生成し、他の理論的枠組みに対してどのような独自性があるのかを明らかにすることの方に力点が置かれていることを意味する。

議論に入る前に、簡単にボルタンスキーの歩んだ軌跡を概観しておこう。ボルタンスキーは 1940 年生まれのフランスの社会学者であり、10 歳年上のブルデューに師事することからそのキャリアをスタートさせた。ところが、しばしば指摘されるように³⁾、彼は 70 年代後半からブルデューと徐々に距離を取り始める。このような姿勢は、84 年に「政治・道徳社会学グループ」を設立することで制度的にも、また、90 年に『能力としての愛と正義』並びに論文「批判社会学と批判の社会学」を世にあらわすことで理論的にも決定的なものとなる。論文のタイトルが示しているように、ボルタンスキーは、自らの立場を「批判の社会学」と呼び、明示的には述べられていないものの、それと対比される形でブルデュー社会学を「批判社会学」と形容することで、ブルデューとの差異化を図った。

だが、その後、ボルタンスキーは、99 年に出版されたエヴ・シャペロとの共著『資本主義の新たな精神』において、批判の社会学と批判社会学との統合を試みる。「批判の社会学を資本主義という古い主題と掛け合わせることによって、批判の社会学を基礎にして批判社会学を再構成すること。これが我々の野望だった」（Boltanski et Chiapello 1999=2005: xiii）。いつときはブルデューとラディカルに距離をとったボルタンスキーだが、

その後の展開からは、ブルデュー社会学からとりわけ批判の側面を継承し、発展させようとする意図が見える。

このようにブルデューとの距離化から統合へと移行したボルタンスキーは、『批判について』において、この統合の方向性に理論的基礎づけを与えることを試みている。そこでは、ブルデューとの距離化の時期に提示された理論的枠組みに大幅な修正が加えられている。とはいえ、両モデルの間に連続性が存在しないわけではない。本論文の前半部が原初状態概念の検討を通して明らかにしようとするのは、まさにこの連続性に関わるものであり、この作業を通してボルタンスキー社会学の核となる部分を提示することが、前半部の主な目的である。

後半部で行なわれることは、原初状態概念を中心に再構成されたボルタンスキー社会学を、ホネットとの関係の中に位置づける作業である。後述するように、ホネットもまたブルデューについて論じ、そのことによって自らの立場を明確化する論文を書いている。そこで提示されたブルデューとの差異化が、ボルタンスキーのそれと、どこまで重なりどこまで重ならないのかを検討することによって、両者が異なる理論構成を取ろうとしている点を明らかにする。この作業を通じて、ボルタンスキー社会学の独自性をより明確化することが、後半部の主なねらいである。

これまで我々が前半部と呼んできたものは本論文の第2節に、後半部は第3節に相当する。第2節は、原初状態概念の内容と、この概念が提出されるに至ったそれまでのボルタンスキーの軌跡を明らかにすることに捧げられる。具体的には次のような手続きがとられる。最初に、1991年に出版されたローラン・テヴノーとの共著『正当化の理論』において仮想敵となっていたいくつかの理論的潮流を同定し、そこからボルタンスキーのブルデュー社会学観を再構成する。この作業によって、ボルタンスキーがブルデュー社会学を次の二つの点から特徴づけていたことが確認される。一つ目は、社会関係の力関係や利害関係への還元、もう一つは、性向の強調

による不確実性の過小評価である。次に、『正当化の理論』における「共通するものの感覚」概念を検討する。この作業によって、『批判について』の中でボルタンスキーを原初状態概念へと向かわせた直接的要因と間接的要因が同定される。前者は共通感覚概念との決別であり、後者は先のブルデュー社会学の二つの特徴に関わるものである。第2節の残りの部分では、原初状態を特徴づける「ラディカルな不確実性」を縮減する装置としての「制度」が孕む、別の種類の不確実性が検討される。この二重の不確実性と、それに付随する社会性や共同性の非所与性が、ボルタンスキー社会学の「核となる部分」として提出される。

第3節では、この非所与性もつ意味を敷衍するべく、ボルタンスキーとホネットとの比較検討が行われる。ここでは、二つの点が確認される。一つ目は、ボルタンスキーがホネットの承認論の中に原初的な共同性や社会性の想定を見出だしている点。もう一点目は、ホネットが捨象した原子論をボルタンスキーが採用している点である。ボルタンスキーとホネットとのこのような差異を、各々のトマス・ホプズ解釈の差異として再定式化する作業が、第3節の最後に行われる。

結論部である最終節では、以上の議論が示唆する、ボルタンスキーのブルデューとホネットに対する位置取りが確認される。

2 ボルタンスキー社会学と意味の不確実性

2.1 『正当化の理論』における二つの仮想敵

ボルタンスキーとテヴノーは2000年に書かれた論文の中で、『正当化の理論』の主な目的を、次のような諸操作を分析するための道具を提供することに求めている。すなわち、人々が批判に没頭する際に行なう操作、自らが生み出した批判を正当化しなければならない際に行なう操作、批判に直面した際に自分自身を正当化する際の操作、そして、正当化された合意に到達するために協同する際の操作である (Boltanski et Thévenot 2000: 208)。したがって、彼らは、正統な合意を目指して批判

や正当化が行われる状況が存在することを前提とする。

このことは、いくつかの理論的潮流との差異化を帰結する。一つ目の潮流は、あらゆる社会関係を「力関係」に還元するような、しばしばマルクス主義からインスピレーションを得た理論。二つ目は、自分の利益を最大化するために用いられる「戦略」としてあらゆる社会関係を扱おうとする、功利主義に由来する社会学理論である⁴⁾。これらの理論は、ボルタンスキーとテヴノーによれば、人々によって表現された正義要求を扱うことはできず、それらをイデオロギーのマスクに還元したり、時には完全に無視さえする (Boltanski et Thévenot 2000: 209)。つまり、これらの理論は、人々が表明する正義要求の中に個人の特殊な利害を実現しようとする動機づけしか見ず、彼らの正義理念を利害や力を覆い隠す幻想としてしか扱わない傾向をもつのである。このような傾向に対して、ボルタンスキーとテヴノーは、行為者の正義要求を真剣に受け取ることを選択する。そうすることで彼らは、人々がどのようにして批判に没頭したり、自らの行為を正当化したり、正当化可能な合意へと収斂しようとするのかに関する経験的研究の道を切り開こうとする。

『正当化の理論』のモデルと区別されるもう一つの理論的潮流は、性向主義と呼ばれるものである。このモデルは、行為主体に不可逆的に刻み込まれており、あらゆる状況において行動を方向づける「性向」を把握することを目指す (Boltanski et Thévenot 2000: 209)。ボルタンスキーとテヴノーのモデルは反対に、社会的現実のあらゆる側面を記述することのできる枠組みを提出することを目的としておらず、あくまで正義の側面にのみ向けられている。また、ボルタンスキーとテヴノーのモデルも行為の可能性を制限する諸制約を検討するものの、それは性向主義のような行為主体の内的決定ではない。むしろ、それは、人々の置かれた状況の配置と結びついた外的制約である (Boltanski et Thévenot 2000: 209)。

力関係を強調する理論と性向主義から距離をとる彼らの姿勢は、合意に

関する説明の中にも現れている。性向主義において、合意の可能性は、ある同一の集団に所属していることに基礎づけられる。この場合、同一の集団に所属しているかどうかは、一連の文化的規範や図式を共有しているかどうかにかかっている。だが、集団や文化を基礎的単位として据えるこのような理論は、異なる文化や利害を持った異なる集団の成員間での合意を説明することができない。そこで、力関係による説明が動員される（Boltanski et Thévenot 2000: 211-212）。ボルタンスキーは、このような説明モデルを、1990年に書かれた『能力としての愛と正義』の中では、「古典社会学」と呼んでいる。

古典社会学は、集団の多元性ゆえに価値が多面的に存在する世界を自らに与えている。しかし、このとき、異なる価値を備えた異なる集団間でどのようにして合意が達成されるのかという問題を提示することは難しい。価値の共有による説明はもはや不十分であり、こうして、ある集団に対する別の集団への支配の効果が引き合いに出されることになる（Boltanski 1990: 81）。

このような力関係の存在を無視することはできないとしながらも、ボルタンスキーとテヴノーは、正義関係というヴェールで隠されているが単なる力関係でしかないという告発に抵抗することのできるような、正当化可能で普遍化可能な合意が、いくつかの状況では存在することを示そうとする（Boltanski et Thévenot 2000: 211-212）。

『能力としての愛と正義』の中では、合意に関するこれら二つの説明モデルが、社会理論が使用する二つの主要な説明形式として一般化されている。一つ目が、力や支配、権力に依拠するモデルである。このモデルにおいては、秩序は見せかけのものにすぎず、強者による弱者への支配や権力の結果とされる（Boltanski 1990: 70）。

ボルタンスキーは、力関係を強調するこのような理論モデルを、正義と

の関係に応じて、さらに二つのモデルに区分している。一つ目が、終末論的と形容されるモデルである。このモデルにしたがえば、社会の秩序は公正なものでなければならないが、現存する現実においては強者による弱者の恣意的な支配が勢力をふるっている。それゆえ、社会に住まう人々の仕事は、この正義の目標を達成することとされる。その達成の先にある、来たるべき調和のとれた理想郷 (cité) を想定するこのモデルは、ボルタンスキーによれば、一つの間人学に依拠している。この場合の間人学とは、「人間存在の能力を特定し、人間性が十分に実現されるために満たされなければならない条件についての反省の道を切り開く」(Boltanski 1990: 71)ものである。先に述べた理想郷は、人間存在の能力が十全に開花されるときに到来するのである。このような理論構成の代表例として、ボルタンスキーはカール・マルクスを挙げる。ボルタンスキーによれば、マルクスの著作は、人間の創造的な能力、とりわけ、労働がもつ創造的な価値を強調する間人学を含んでいる。この間人学に従えば、労働は、搾取から解放され、欲望の法則に従うようになれば、幸福を保証する満足感をそれ自体で作り出すことができる。「歴史哲学と結びつけられることで(世界の審判としての歴史)、この間人学は、現存の世界を批判する際の一つの支えを提供している」(Boltanski 1990: 71)。

力関係を強調する理論モデルが辿るもう一つの道を、ボルタンスキーはフリードリヒ・ニーチェやマックス・ウェーバーに代表させている。このモデルは、「未来に起こりうる世界に存在する調和のとれた理想郷という目標に批判の根拠を据えることを諦め、正義の問題を捨ててしまう。このとき正義は、幻想として扱われたり、ウェーバーにおけるように、個人的な選択の偶発性と同じようなものとして扱われる」(Boltanski 1990: 71)。「ニーチェにおいて最も完成した定式化を見つめることができる」(Boltanski 1990: 71)このようなモデルもまた、批判的態度を可能にする。この批判的立場は、価値の専制から自らを解放し、諸価値の基底にある利

害や力を暴露することによって、すなわち、共通善を一つの特異な利害に還元することによって、様々な価値のうち一つを取り上げ、それを別の価値に敵対させることから成る。遍在する隠れた力を同定し、あらゆる決定を力の結果と見なすこのような一般化の帰結の一つは、我々が暴力として認識するものと、我々が黙認、権利、自由に受け入れられた規律として同定するものとを区別することができなくなるものとされる (Boltanski 1990: 72)。

社会理論が使用する二つの主要な説明形式のうちのもう一方は、ボルタンスキーがデュルケムのもしくは文化主義的と名づけるものであり、これまでの議論との関わりで言えば性向主義と言い換えられるものである。それは、共通価値、共通の文化、表象や無意識といった概念を参照するモデルである。このモデルにおいて、「人々はオーケストラ編制された行動⁵⁾をもつ、なぜなら、彼らは同じモデル、同じ価値、もしくは同じ図式を内面化しているからであり、それによって行動は内面から方向づけられ、……習慣という様式で形作られる」(Boltanski 1990: 72)。

これらの説明モデルに対して⁶⁾、ボルタンスキーは、一方で暴力や習慣の重要性を認めながらも、他方であらゆる状況を暴力や習慣によって説明しようとする主張に異議を申し立てる。ボルタンスキーが提示するモデルは、「いくつかの状況、すなわち、人々が批判と相対しているような状況においては——それは多く存在する——、合意に到達するために、あらゆるものに当てはまる原理を参照して自らを正当化することができなければならないということを論証しようとする」(Boltanski 1990: 72) ものである。

2.2 ボルタンスキーのブルデュール理解

ここまで我々は、『正当化の理論』のモデルが、とりわけ、力や利害、暴力といった点を強調するモデルと、性向主義もしくは文化主義と呼ばれるモデルを主な仮想敵に据えていたことを確認した。この節では、ボルタ

ンスキーがブルデュー社会学を、これら二つのモデルから特徴づけていた点を確認しておきたい⁷⁾。

まず力関係の強調という点から確認しておこう。ボルタンスキーはブルデューの「象徴的暴力」概念にこの点を見出だしている。

この本（『正当化の理論』）で展開された論拠は、以下のように要約することができます。八〇年代の多くの研究と同様、われわれは六〇～七〇年代に流行した理論のドグマ的偏向に対する態度を取っています。そうした理論は、フーコーやブルデューの影響下で、彼らが若い頃に（五〇年代の高等師範学校で）愛読した（バタイユ版の）ニーチェ哲学と、学生から嫌われないよう六〇年代末に遅れて取り入れたマルクス主義とを混合させたものでした。すべてのアクセントを力関係や利害関係、さらには暴力に置く（象徴的暴力のような概念は、あらゆる社会関係を暴力の一形態とみなすことを可能にするわけですから）こうした理論に抗し、われわれは人々が正当化可能な合意において一致する状況が存在することを示そうとしました。力関係と利害関係は確かに存在しますし、非常に重要です。しかしわれわれの考えでは、すべての人間関係が力関係と利害関係だけに支配されるなどという世界は、まったく疑わしいものです（Boltanski 2011b: 6）。

『批判について』の表現を借りるならば、暴力が暴力として行為者自身に記述され経験される物理的暴力と異なり、象徴的暴力は大抵の場合暴力として経験されない（Boltanski 2009: 42）。経験されない以上、あらゆる社会関係にこの種の暴力が伏在している可能性を完全に否定することはできない。このようにして象徴的暴力の遍在性が認められるとき、「自らの力の根底にある力関係をおおい隠す」（Bourdieu et Passeron 1970=1991: 16）象徴的暴力は、あらゆる社会関係を力関係といった垂直的次元に還元する傾向をもつ。前節でも指摘したように、社会関係のこのような還元

は、人々によって表明された正義要求の中に力や利害の表現しか認めない態度をもたらす。

ブルデュー社会学を性向主義ないし文化主義と理解する傾向は、ボルタンスキーのハビトゥス解釈に見出だすことができる。彼はハビトゥス概念を、ルース・ベネディクトやラルフ・リントンの人類学に由来するものと考えている。ボルタンスキーはこの人類学に「文化主義的」という形容詞を与える。ボルタンスキーによれば、彼らの人類学は、個人の「性格特性 (caractère)」とその個人が浸っている文化の「性格特性」との関係について問うたものであり (Rennes et Susen 2010: 151)、ここでの中心的な考えは、文化の性格特性を同定できれば、その性格特性は、その文化に浸っている個人の心理学的性向の中に再び見出だすことができるというものである (Duvoux 2011: 1/Sociologie critique et sociologie de la critique section, para. 6)。このことは、もし行為者の文化的属性が分かれば、行為者の性向が分かり、どのような状況であれこの行為者がどのように対応するのかを前もって分かるという考えを導く (Duvoux 2011: 1/Sociologie critique et sociologie de la critique section, para. 6)。ボルタンスキーは、ブルデューがこのような問題構成の一部を採用して、それを社会階級の問題に適用したと考えている (Rennes et Susen 2010: 152)。このように特徴づけられるハビトゥスについてボルタンスキーがとりわけ問題にするのは、社会生活の中で行為者が直面する不確実性を過小評価する傾向である。「何が起きているのか」について意味を与えるために引き合いに出される理由が複数存在すること、この複数性によって行為者が不確実性に直面すること、行為の文脈によってこの不確実性が明瞭に変化すること、これらの点がハビトゥス概念によって見落とされてしまうとボルタンスキーは考える (Rennes et Susen 2010: 152)。

2.3 共通感覚

これまで我々は、ボルタンスキーがブルデュー社会学を次の二つの点か

ら特徴づけていたことを明らかにしてきた。一つ目は、文化的内面化の所産である性向が強調されることで、社会生活における不確実性が過小評価されている点。もう一つは、社会関係が力や利害といった点に還元されることで、行為者の規範的要求がないがしろにされている点である。

ボルタンスキーが『正当化の理論』で企図したことは、まさにこれら二つの点によって捨象される次のような状況を主題化することだった。それは、正統な合意を目指して正当化や批判が行なわれる論争である。この種の論争は、一方で、力関係が比較的均衡した状況で展開されるものであり、それゆえ、そこで達成される合意は暴力への訴えを前提とするものではないという特徴をもつ。「本書（＝『正当化の理論』）が扱うのは、合意と不和の関係である。行為者は、暴力に訴えることなく不合意を表明しようとするさい、批判の操作を実行する。また行為者は、多少とも持続する合意を築き、表明し、確固たるものとするための操作を行なう」（Boltanski et Thévenot 1991＝2007: 30）。このような諸操作から成る論争は、他方で、その結果だけでなく、様々な論争相手が引き合いに出す事実やそれについての解釈もまた不確実であるという特徴をもつ（Boltanski 2009: 44）。それゆえに、そこで達成される合意は、ハビトゥスの同質性もたらす自生的な合意とも明確に区別される。社会生活における不確実性を過小評価する傾向にある性向主義は、このような論争の様相を分析の俎上に載せることが難しい。

以下、『正当化の理論』で提示された分析枠組みに言及していくが、それを体系的に要約することは本論文の主題ではない。それはすでにいくつかの仕事でなされている⁸⁾。したがって、この学派独特の難解な用語をできるだけ用いずに、本論文の後の議論と関わる内容だけに言及していきたい。

ボルタンスキーが念頭に置いている論争とは、たとえば次のような事態である。

二人の研究者がコンピューターを使用しています。コンピューターの一方は古い機械で、他方は新しい高性能の機械です。研究者のひとりはいこう反抗するでしょう。良い機械はいつも（たとえば年長である、あるいは上の職位を占めているという口実で）自分より情報科学がずっと得意でない同僚に与えられ、いつも古い機械が与えられる。これは不公平だ！と (Boltanski 2011b: 12).

彼は、人格的従属関係のヒエラルキーに占める位置の如何によって人々が評価され、それに基づいて分配が行なわれていることを批判し、労働生産性の高い人間が高性能なコンピューターを持つことが善であるという自らの主張を正当化しようとしている。このように、ボルタンスキーが対象とする論争とは、ある状況にいる人々の相対的価値の序列が問題となるようなそれであり、財の分配を左右するこのような人々の価値づけは、一般的妥当性をもった価値階梯に依拠して行なわれる。だが、もちろんそのような価値階梯は、上の例からも分かるように、一つではなく複数存在する。三浦直希が述べているように、『正当化の理論』のもくろみは、異質な複数の価値階梯の間で生じる矛盾や葛藤に着目し、紛争の解決や妥協がいかに行なわれるかを解明することにある (三浦 2011: 226)。

この種の論争に参画する人々には二つの能力が想定されている⁹⁾。一つ目の能力は「道徳感覚 (sens moral)」と呼ばれるものであり、正当化の操作を可能にするものである。これは次の二つの制約に従う能力から成る。一方の制約は「共通の人間性」(Boltanski et Thévenot 1991=2007: 179) と呼ばれる制約であり、これにしたがえば、我々は合意のなされるべき相手を同じ平等な人間として認めなければならない。もう一方の制約は「序列」(Boltanski et Thévenot 1991=2007: 179) と呼ばれるそれであり、これは、上記の一般性をもった価値階梯に依拠して人間存在を序列化することが要求される。この価値階梯の一般性によって、無数に存在しうる人間

や事物の関連づけ方，上記の例で言えば，二人の研究者とコンピューターの関連づけ方が規制され，正当化しうる関連づけと正当化しえない関連づけが区別される (Boltanski et Thévenot 1991=2007: 179)。

二つ目の能力は、「自然なものの感覚 (sens du naturel)」と呼ばれるものである。それは，対象となっている状況の自然を認識し，それに適合する価値階梯を活性化する能力である。この感覚によって，その状況にとって「筋の通った関連づけ (rapprochement sensé)」 (Boltanski et Thévenot 1991=2007: 180) を行なうことが可能となる。上記の研究者が既存の関連づけ方に対して不公平だと異議申し立てできたのは，労働生産性に応じて研究者とコンピューターが関連づけられていない今の状況を「不自然」だと認識する能力を持っていたからである。

ボルタンスキーは，正当化に関わる「道徳感覚」と，筋の通った関連づけに関わる「自然なものの感覚」を合わせて，「共通するものの感覚 (sens du commun)」と呼んでいる。このような能力は，「人々に同一のプログラムを与え，協議ぬきで人々を一致して行動させる文化主義によって無視されている」 (Boltanski et Thévenot 1991=2007: 179) ものとされる。

ところが，2009年に出版された『批判について』の中で，人々にこの種の能力を想定することが否定される。それは，文化主義ないし性向主義を否定する論拠として持ち出された，社会生活における不確実性の果たす役割の重要性を徹底化するためである。

2.4 共通感覚の否定とラディカルな不確実性

この本の中で，ボルタンスキーは，『正当化の理論』で提示された立場の主要な欠点を次の事実に求めている。それは，行為者が合意に到達する能力に多大な信頼が寄せられることによって，強調されるべき不確実性が簡単に吸収されてしまったことである。「……行為者は，何かが辻褃が合うように協同しようとするある種の暗黙の意志が与えられることになる。あたかも，社会にいる人々には社会的（ローカルな）配置を守ろうとする

欲望、紐帯を良い状態に維持しようとする欲望、現実への支持を回復しようとする欲望が必然的に宿っているかのようになる。このことによって、社会的空虚に対する恐怖は、『ホモ・ソシオロジクス』の主要な欲動となる」(Boltanski 2009: 89)。行為者が意味や紐帯を作り出したり修復したりするこの種の能力を、ボルタンスキーは「共通感覚 (sens commun)」(Boltanski 2009: 89) と一括して呼んでいる。明確な言及はないが、『正当化の理論』の枠組みで言えば、上記の「共通するものの感覚」に相当するものと考えてよいだろう。

ただし、共通感覚に類したものに準拠は、他の多くの理論的潮流にも見られるとされる¹⁰⁾。その一つが、先の文化主義的人類学である。文化主義的人類学において、共通感覚とそれに基づく合意の出現は、幼児期の教育を通じた社会化という形で説明される (Boltanski 2009: 91)。このように、異なる形ではあれ共通感覚が想定される結果、文化主義的人類学も、それから距離を取ろうとしたボルタンスキー社会学も、合意がある種の必然性をもったものとして扱われるという点では、変わらないものになってしまう。このとき、不和や論争、それと結びついた社会生活を脅かす不確実性は、ないがしろにされてしまう。

ボルタンスキーが原初状態概念を持ち出してきた背景の一つはここにある。彼は原初状態の中心に、存在するものがどのようなものなのか、何が重要であるのか、何が価値があるのかに関する「ラディカルな不確実性」と、それに付随する合意の困難性を置いている。あるインタビューの中で、ボルタンスキーは、原初状態をこのように特徴づけたねらいの一つを、次のように表現している。すなわち、すでに共同性や社会性が存在しているような状態を原初的なものとして置くのではなく、ひどく苦労して共同的なものを作ろうとするバラバラの諸個人の存在を議論の出発点とすることである (Duvoux 2011: 2/*De la critique: Les concepts centraux* section, para. 7)。共通感覚のようなものに準拠することの否定は、まさ

にこうしたねらいから行なわれたのであり、それは、不確実性の強調という、文化主義ないし性向主義を批判する際に掲げられていた姿勢と連続していると言ってよい。

ただし、バラバラの諸個人から議論をスタートさせるからといって、ボルタンスキーは諸個人間の利害対立を前面に出すわけではない。「この不確実性の公理は、利害闘争を強調するものではなく、その代わりに、『象徴的形態』と『事態』……との関係を固定する明確な方法に関して人間存在が自生的に合意に到達することの不可能性を強調するものである」(Boltanski 2013: 51)。つまり、ここで問題となっているのは、ホップズにおけるような諸利害間の死闘ではなく、意味の断片化や私的言語への内向というリスクを引き起こす無理解なのである (Duvoux 2011: 2/*De la critique: Les concepts centraux* section, para. 7)。したがって、ラディカルな不確実性概念の導出は、これまでの議論との関わりで言えば、文化主義を批判する文脈の中にだけでなく、あらゆる社会関係を力や利害といった観点から説明しようとするモデルを批判する文脈の中にも位置づけられるものである。

2.5 ラディカルな不確実性から解釈学的矛盾へ

前節では、ボルタンスキーが原初状態概念を提出したその理論的背景を検討した。それは、直接的には共通感覚の否定による不確実性概念の徹底化であったが、ボルタンスキーのそれまでの仕事を考慮に入れれば、ブルデュー社会学の二つの特徴をその間接的要因と考えることができる。その二つの特徴とは、文化主義ないし性向主義に付随する不確実性の過小評価と、社会関係の力関係や利害対立への還元である。

本節では、原初状態概念やラディカルな不確実性概念が提出された背景ではなく、その中身を検討していく。この作業によって、ボルタンスキーの理論の中に、ラディカルな不確実性とは別の新たな不確実性が付け加えられる。

まず、原初状態が、ラディカルな不確実性とそれに付随する合意の困難性という観点から特徴づけられる理由を明らかにしていこう。ボルタンスキーはその理由を、我々が身体を所有しているという単純な事実に戻している (Boltanski 2008: 19)。彼によれば、身体を持つことで、我々は必然的に、外側にも、内側にも位置づけられる。外側に位置づけられるとは、個人がある時間の瞬間に置かれ、ある空間の点に置かれるということである。他方で、内側に位置づけられるとは、個人が欲望、衝動、趣味、嫌悪、彼の肉固有の経験などを持つということである。「その結果、原初状態からは、各々の個人は世界に関して一つの『観点』しか持つことができない」 (Boltanski 2008: 20)。原初状態において、諸個人の観点はバラバラであり、それらを一致させる権威や権力を所有している個人は一人もいない。言い換えると、「その状況の不確実性を吸収したり、その不確実性が喚起する不安を一掃するために活用されなければならない資源を自分で持っているものは、誰もいないのである」 (Boltanski 2008: 20)。

では、存在するものがどのようなものなのかという問いに答えることができるのは誰なのか。この問いがピエールやポールやジャックにとってどのようなものなのかという問いではなく、あらゆるものにとってそれはどのようなものなのかという問いなのだとすれば (Boltanski 2008: 25)、身体をもつがゆえに一つの観点しか与えることのできない個人には、その任を全うすることはできない。

ボルタンスキーの思考実験が提示する解決策は、この問いに答える仕事を「身体なき存在」に委譲することである。そして、ボルタンスキーにとって「制度」こそが、この身体なき存在なのである。「制度とは、存在するものがどのようなものなのかを言う仕事が委譲された、身体なき存在である。したがって、何よりもまずその『意味論的』機能において、制度を検討しなければならない」 (Boltanski 2008: 26)。

合意と制度との関係をこのように捉えることによって、ボルタンスキー

は、彼が「合理主義的仮説」と呼ぶものから自らを区別している。「様々な見解の中からより抜いたり、一つの総合へと到達することを可能にする装置として議論を捉え、この議論の力だけを当てにする仮説は、あまりにも強すぎて、ほとんど現実的ではないように思える」(Boltanski 2013: 53).

だが、ここで一つの問題が生じる。それは、身体をもたないがゆえに、制度は喋ることができないのである。それゆえ、制度は、我々と同じように身体を持った「スポークスマン」を必要とする (Boltanski 2008: 28).

このことは一つの両義性を導く。一方で、我々は制度を信頼しなければならない。というのも、制度が介入しなければ、存在するものがどのようなものなのかについての不確実性は増すばかりであり、このことは軋轢や暴力の火種となる。だが、他方で、制度は「虚構」でしかなく、存在するのは身体をもった人間だけなのではないかと疑うこともできる (Boltanski 2008: 28).

社会生活の基礎にあるこのような緊張を、ボルタンスキーは「解釈学的矛盾」と名づける。

それは次のようなジレンマを提示する。一方でそれは、……「存在するものがどのようなものなのか」を言うことを諦めることから成る。そうすることで、「観点」の交換がより行なわれるようにはなる。しかし、それは同時に、議論や解釈を一時的にでも閉じることができなくなったり、さらには、一つの共通感覚＝常識の形成を妨げる真の意味論的断片化を引き起こしたり、最終的には暴力を生じさせるリスクをもたらす。ジレンマのもう一方は、「存在するものがどのようなものなのか」を言う仕事を、身体なき存在、すなわち制度に委譲することからなる。だが、このとき、次のような「不安」を永続的に生じさせてしまうことになる。すなわち、制度に自らの意見を表明することを可能にするスポークスマンが、この身体なき存在の意志をしっかりと

翻訳しているのか、それとも、制度に言葉を与えるように見せかけておいて、自分の意志を押しつけ、利己的な欲望、すなわち、あなたと私と同じように身体をもった存在の欲望を満たそうとしているのではないかという問題に関する不安である (Boltanski 2008: 28-29)。

ラディカルな不確実性からなる原初状態から出発したボルタンスキーの議論は、こうして別の種類の不確実性を加えることになる。それは、ラディカルな不確実性を縮減するために「存在するものがどのようなものなのか」を言う仕事を委譲した先の制度のスポークスマンが、実際は一個人の観点を述べているだけなのではないかという疑いに起因する不確実性である。この不確実性は、制度の登場が必ずしも社会性や共同性の生成を意味するわけではないということを示唆している。ここでもまた、原初状態をラディカルな不確実性として特徴づけたときと同様に、社会性や共同性を所与のものとして認めないボルタンスキーの姿勢を見出だすことができる。

以上から、本論文は、次の二重の強調を「ボルタンスキー社会学の核となる部分」として提示しておきたい。それは、不確実性の強調とそれに伴う社会性や共同性の非所与性の強調である。

3 ボルタンスキー社会学と意味的原子論

ここまでの議論の要点を確認しておこう。ボルタンスキーは、ブルデュー社会学を、社会関係の力関係や利害対立への還元、それから、性向主義という二つの観点から特徴づけていた。そこで見落とされる点として、ボルタンスキーは、社会生活における不確実性を強調し、それを己の社会学の中心に置いた。このパースペクティブを徹底化することによって生み出されたのが原初状態概念であり、それはラディカルな不確実性が支配する状態として特徴づけられる。この種の不確実性とそこから帰結する解釈学的矛盾を自らの理論に与えることによって、ボルタンスキー社会学

は、あらかじめ社会性や共同性を措定しない方向へと進んだ。

ボルタンスキー社会学のこのような視点の独自性、とりわけ、社会性や共同性の非所与性に関するそれは、同じように社会批判的アプローチを展開すると同時に、同じようにブルデュー社会学の功利主義的性格から距離をとったホネットの理論と比較検討することによって、際立たせることができる¹¹⁾。

あるインタビューの中で、ボルタンスキーはホネットに関して「出発点異なる」(Rennes et Susen 2010: 158)と述べている。ただし、インタビューという形式上、その出発点の違いが体系的に説明されているわけではない。本節の仕事はその体系化にある。

最初に、ボルタンスキーとホネットを比較するための共通の土台作りが行なわれる。具体的には、ホネットのブルデュー解釈の検討から議論が始められる。そこで明らかになるのは、ホネットがブルデュー社会学の中に功利主義的性格を認め、とりわけその闘争論という点からブルデューと差異化を図った点である。ホネットが提示するのは、承認という道徳的動機づけと間主観性を特徴とする「承認をめぐる闘争」である。

承認論のこれら二つの特徴を踏まえる形で次に行なわれるのは、ボルタンスキーのホネット観の検討である。ここでは、二つの点が確認される。一つ目は、両者ともブルデュー社会学における利害関心の強調から一定の距離をとりながらも、ホネットが社会性や共同性を原初的なものとして置く理論構成になっている点に、ボルタンスキーがホネットとの違いを見出していること。もう一点目は、あらかじめ社会性や共同性を理論の中に措定しないがゆえに、ボルタンスキー社会学は、ホネットが斥けた原子論を採用していることである。

本節の残りの部分では、両者のこのような違いを、それぞれのホップズ解釈の違いとして再定式化する作業が行なわれる。

3.1 功利主義的闘争論としてのブルデュー社会学

ホネットはブルデューについての検討を、『実践理論の素描』から始めている。ホネットによれば、ブルデューは、アルジェリアのカビル族に関する経験的調査を行う中で、レヴィ＝ストロースの構造人類学が想定していた言語学的モデルとの不一致を発見した。それは、「社会的現実や集合的歴史を秩序づける際に部族の成員が用いる象徴的分類体系の中に、不確定性と非一貫性が見られたこと」(Honneth 1990=1995: 185)である。この点を説明するためにブルデューが行なった操作が、ホネットによれば、「構造人類学の功利主義的変換」(Honneth 1990=1995: 186)である。ブルデューは、カビル族が象徴的分類体系をどのように適用するかは、その部族共同体の社会的ヒエラルキーによって規定される諸利害の布置連関に左右されると考えた。したがって、象徴的分類体系はあくまで、ヒエラルキーにおける自分の地位や名声を高めるために用いられるものとなる。「たとえば、親族分類を巧みに操って、ある尊敬されている祖先を自分の祖先であると主張することに成功した集団は、部族共同体における自分の地位の価値を決定的に高めることができた」(Honneth 1990=1995: 186)。こうして、ブルデュー社会学において象徴的实践は、「社会的ヒエラルキーにおける名声や地位をめぐる競争で用いられる戦略」(Honneth 1990=1995: 186)として扱われ、経済的实践と同じ位相に置かれる。

ハビトゥス概念も、ホネットはこの功利主義的変換の延長線上で理解している。ホネットはハビトゥスを、功利主義的行為論のように効用の最大化という明確な意図を持った行為者を想定するのを避けるために導出された概念であると考えている。功利計算は行なわれるものの、それはあくまで、無意識レベルにある集合的な知覚評価図式においてなのである。したがって、ブルデューの枠組みにおいては、たとえ本人が主観的には別様に行動しているつもりでも、実際には、所属集団と結びついたこのような図

式にしたがって効用性を計算しながら行為していることになる。「行為の主観的に意識された平面は、それゆえに、行為の習慣的に意図されたねらいと一致する必要はなくなり、後者は、原則的に、効用の最大化によって規定されているのである」(Honneth 1990=1995: 187)。

このようにブルデュー社会学を功利主義的に理解することでホネットがとりわけ批判するのは、ブルデューの闘争観である。ホネットは、ブルデューの枠組みにおいて、社会的闘争が財の分配をめぐる功利主義的闘争に切り詰められていることを難じる。

彼の文化分析が依拠している経済中心的な考えによって、彼は、あらゆる社会的紛争の形態を、社会的分配をめぐって生じる闘争の型に包括せざるを得なくなっている。しかしながら、……社会的承認をめぐる闘争は、異なる論理に明確に従っている。……分配をめぐる経済的闘争が、……自分の効用にしか気を留めていない闘争者たちの間で行なわれる論争であるのに対し、道徳—実践的闘争の中で対立しているそれぞれの集団は、他者からの規範的賛同を得ようとして闘うのである (Honneth 1990=1995: 200)。

社会的闘争を反功利主義的な方向に解釈しようとする姿勢は、ホネットの代表作である『承認をめぐる闘争』の中にも見出すことができる。彼は、愛、法、連帯という三つの承認形式に対応する軽蔑（尊重の欠如）が経験されることで生じる「承認をめぐる闘争」と、自己利害を闘争の動機づけとする「自己保存をめぐる闘争」とを明確に区別している。後者は、マキアヴェリとホッブズによって体系づけられた概念として理解されている。「永続的な利害対立が存在するかぎり、政治的共同体とおなじようにそれぞれの主体が互いに対峙しあうとする」とらえ方は、政治について論じたマキアヴェリの著作において理論的に準備され、最終的にはトマス・ホッブズの著作において、社会契約説によって国家主権を根拠づけていく

基盤となった」(Honneth 1992=2003: 8). ジャン・フィリップ・デランティによれば、ホネットは、ヘーゲルとホッブズとの位置づけを次のように整理している。一方でヘーゲルは、ホッブズから、社会生活を構成する諸個人間の闘争という概念を借りる。このことによってヘーゲルは、自らをアリストテレスから区別する。というのも、アリストテレスの社会的結合論の中核にある「人間の本性」という概念が、社会性は対立的関係の産物であるという考えを通じて、動態化されるからである (Delanty 2009: 192-193). だが、他方でヘーゲルは、アリストテレスに依拠する形で、ホッブズの原子論的な捉え方に異議を唱える (Delanty 2009: 193). 「……共同体への関わりが人間の本性にはすでに基体としてそなわっているとするとアリストテレスの考えに、ヘーゲルがなおも導かれているのはまったくあきらかである」(Honneth 1992=2003: 18). こうして、ヘーゲルにおいて原子論に対する間主観性の優位性が説かれることになる。

……どんな哲学的な社会理論も、まず孤立した主体をそれぞれの行為の遂行からではなく、それ以前から主体が共同して活動する枠組みをなしている人倫的な結合から出発しなければならない……。したがって、原子論的な社会理論とは異なって、人間の社会化の自然的な基盤をなす様態として、間主観的な共同生活という基本的な形式が現存していることにすでに示されているような状態が想定されなければならない (Honneth 1992=2003: 18).

もちろん、ホネットはブルデュー社会学をホッブズ的な原子論の枠組みから捉えていたわけではない。それは、ハビトゥスという集合的な次元を備えたものが行為者において果たす役割の重要性をホネットが認識していたことから推測できる。しかし、ブルデューの闘争論の中に自己利害という功利的な動機づけを見出だしていたという点で、ホネットはブルデューにホッブズ的な「自己保存をめぐる闘争」を見て取っていたと言う

ことができるだろう。

おそらく、この点にボルタンスキーとホネットとの共通性を見出すことができる。というのも、前述のように、ボルタンスキーもまた、ブルデュー社会学における利害の強調から距離をとる形で、自身の理論を構築しようとしていたからである。

したがって、ボルタンスキーがホネットについて「出発点が異なる」と言ったのは、利害闘争の強調から距離をとろうとした姿勢についてではない。それは、承認論のもう一つの側面、すなわち、間主観性についてである。

3.2 原初的な共同性の有無

前節では、社会的闘争という観点からブルデューとホネットを比較検討した。そこでは、ホネットが闘争の動機づけという点からブルデューとの差異化を行なっている点が確認された。また、同じく自己利害という功利的動機づけを闘争の中心に据えるホップズとの比較を行なうことで、ホネットの承認論が、原子論からの距離化という点からも特徴づけられる点を確認した。

承認論のこれら二つの特徴を念頭に置きながら、ボルタンスキーのホネットに関するコメントを見ていこう。少し長くなるが、該当箇所を全文引用したいと思う。

私にはホネットの理論は共同体の人間学の一形態に依拠しているように思います。すなわち、共同性が人間存在に本来的に備わっているという考え、共同体の感覚が社会的配置に先在しているという考えです。ホネットは、人間学的所与の一形態としての承認欲求から出発しています。そしてこの形態に基づいて社会が構築されると考えています。『批判について』は、反対に、共同生活に関する二重の不確実性から出発しています。次のような状況を想像してみてください。私はある川で釣りをしていて、子供たちがぬかるみを歩

いていて、農家の人たちが家畜の糞尿を流しに来ていて、エコロジストたちがサンプリングを行なっています。しばらく経つと、このことはもうもちこたえられなくなり、両立不可能になります。……行為者はこのとき、その人々が誰で、何が起っているかを性質決定 (qualifier) しようとしています。この作業は、しばしば、制度に委譲されます。制度とはすなわち、喋る身体なき存在です。それは釣り用の池だ、それは子供用のプールだ、など。ここに第一の不確実性があります。つまり、そこで何が行なわれているのか、誰がどのような人物なのかに関する不確実性です。しかし、二つ目の不確実性がやってきます。それは、制度のスポークスマンが身体を持っており、このスポークスマンは自分の観点から喋る普通の個人なのではないかと常に疑うことができることから生じる不確実性です。そういうわけで、ホネットと違って、私の仕事は、分散や不確実性の中にいる人間存在を考えているのであり、人間存在がこの断片化や不確実性を縮減するためにどのようにして諸装置をとっても苦勞して構築しているのかを分析します (Rennes et Susen 2010: 158)。

前述のように、ホネットは、ヘーゲルを、ホップズ的な原子論と対比されるものとして捉えていた。つまり、主観性の形成が間主観的關係に依存していることを説くヘーゲルの枠組みにおいて、諸個人は、「主観を超えた基本的な諸要素の共有を通じて、つねにすでにお互いにつながっている」(Delanty 2009: 193) ものとされる。だが、ボルタンスキーには、承認論のこのような性格は、共同性や社会性をあまりに素朴に前提として見えるのである。ボルタンスキーは別の箇所でもホネットについて同様の主旨のことを述べている。曰く、ホネットは、承認論を使って、ある種の基礎的な (fondatrice) 社会性や原初的な利他主義を公準として立てており、まるでホネットは、共通感覚＝常識を確立するのにひどく苦勞するバラバラの諸個人を自分に与えることから成る状態を、極度に悲観的なものとして、捨てているようであると (Duvoux 2011: 2/De la

critique: Les concepts centraux section, para. 7).

以上から、ボルタンスキーとホネットとの関係性を次のように要約することができる。すなわち、両者とも利害闘争といった功利性を基礎に置く理論構成から出発することを避けながらも、ホネットが社会性や共同性を分析の出発点に置く傾向のある理論構成へと進んだのに対し、ボルタンスキーはホネットが原子論として斥けた立場を選んだ。ただし、それは、功利主義的な原子論ではなく、意味に関する原子論である。

次節では、両者のこのような違いをより明確化する作業を行っていきたい。具体的には、両者の拠って立つこのような分析の出発点の違いを、ホップズに対する各々の態度決定の違いとして再定式化していきたい。

3.3 ホップズ解釈の違い

前節では、ボルタンスキーとホネットとの関係性を、社会性や共同性を原初的なものとして措定するか否か、原子論を斥けるか否かという点から特徴づけた。

ホネットを共同性の側へと進ませた一因として、彼のホップズからの距離化が存在したことはすでに述べた。だが、ホップズの影響力は、ボルタンスキーの思考実験にも見ることができる。彼は、原初状態と制度という着想が、ホップズの『リヴァイアサン』から影響を受けたものであることを認めている。

……私は、「ラディカルな不確実性」が支配している「原初状態」から、社会的世界の一貫性の問題を提示するために、共通感覚の自明性を括弧に入れたと思う（このことは、契約主義的仮説における自然状態と同様に一つの思考実験である。しかも、契約主義的仮説は、『リヴァイアサン』において、「バベルの塔でうしなわれたもの」と一般的敵意の脅威との関連づけを含んでいる）(Boltanski 2009: 97).

「バベルの塔でうしなわれた」という表現は、『リヴァイアサン』の第4章「ことば (speech) について」に見つけることができる。ホッブズによれば、ことばの発明は、印刷や文字の発明以上に重要なものである。ことばのおかげで人々は、自分の考えを記録したり、それが過去のものとなっても思い出したりすることができる。さらには、自分の考えを表明することで、相互の効用を高めたりコミュニケーションをとることもできる。ことばがなければ、「人びとのあいだには、……コモン・ウェルスも社会も契約も平和も、なかった」(Hobbes 1651=1954: 68)。ことばの創造主は神であり、彼はアダムに被造物をどのように名づけるかを指示した。しかし、「アダムとその子孫によってえられ増加させられたこの言語は、バベルの塔でふたたびうしなわれた」(Hobbes 1651=1954: 69)。バベルの塔の建立は神に対する反乱と見なされ、あらゆる人間が、従来の言語の忘却という罰を神から受けることになったのである。その結果、彼らは、世界のさまざまな部分に分散せざるを得なくなった。ここに、多様な国語の誕生する契機が存する。すなわち、「現在のよな国語の多様性は、必要(すべての発明の母)がかれらにおしえるようなやりかたで、かれらからしだいに生じて」(Hobbes 1651=1954: 69) きたのである。

ことばは社会やその平和の条件であり、国語はことばの不在による暴力の発生を食い止める「必要」から生まれた。ことばの起源に関するホッブズの説明をこのように解釈し、ことばの欠如した状態をラディカルな不確実性として特徴づけてよいのであれば、ボルタンスキーの次のような言明も合点がいく。

我々は、ラディカルな不確実性と自然状態とのつながり、および、意味の「非一貫性 (flottement)」と暴力とのつながりが、少なくとも潜在的には、ホッブズによって確立されていることに気づくだろう。それはとりわけ、ホッブズの『リヴァイアサン』の「ことば」に関する章の中に見られる。同様のテー

マは、契約の問題に取り組まれるときにも展開されている¹²⁾……。しかしながら、ホッブズの問題構成は、社会科学によって取り上げられるときには、むしろ妬みのテーマに、さらには、暴力の源泉としての人間の欲求 (appétits) の際限のない性格というテーマに向かっていたのである。これが、国家の必要性を正当化するために使われた論拠である。……ここでの仕事の中で強調されるのは、むしろ制度の意味論的役割である (Boltanski 2009: 254)。

このような形で再解釈されたホッブズは、ボルタンスキーの視点を、彼の言う原初状態という意味での社会性や共同性の成立していない状態へと導いた。他方、ヘーゲルを経由する形で功利主義的かつ原子論的に解釈されたホッブズは、ホネットを、バラバラで孤立した諸個人を出発点としないう理論構成へと向かわせた¹³⁾。このようにボルタンスキーとホネットとの関係性を整理することができるだろう。

4 終わりに

本論文は、原初状態概念の検討を通じて、ボルタンスキーをブルデューとホネットとの関係性の中に位置づける作業を行ってきた。そこで明らかにされたのは、三者の基本的な理論構成の違いである。ボルタンスキーやホネットから見たブルデュー社会学は、二つの強調から成り立つものだった。一つ目は、利害や、ボルタンスキーであればさらに力の強調。もう一つは、集合的なものの内面化の所産である性向の強調である。ホネットは、明確に反功利主義的立場をとると同時に、間主観性論という形でブルデューと同じく原子論を斥ける。他方、ボルタンスキーは、ホネットと同じく利害闘争を議論の出発点に置かないものの、ハピトゥスや承認欲求といった共通感覚を措定することを避け、意味的原子論とも呼ぶことのできる立場を採用している。

冒頭で述べたように、本論文は、社会学の批判的側面を時代の要請に応える形で更新しなければならないという社会学の今日的課題に取り組むた

めの、いわば下準備として位置づけられるものであった。意味に関する根本的な不確実性と原子論から議論を出発させるボルタンスキーの理論が、このような課題に対して、どのような独自の貢献を果たすことができるのか。この点を今後の課題とすることで、本論文を閉じたい。

[付記] 本稿は平成 25 年度文部科学省《卓越した大学院拠点形成支援補助金》の助成による研究成果の一部である。

注

- 1) バウマンによれば、テオドール・アドルノやマックス・ホルクハイマーが対象としていたモダニティは、全体主義的傾向を特徴としていたそれであり、そこでは「公的なもの」によって侵略される個人の自由や自律を擁護することが批判の目標とされていた。それに対して、個人化の進んだ今日のモダニティにおいては、個人になることの自由ないし権利は平等に分配される一方で、その自由や権利を謳歌するための諸資源は不平等に分配されている。このような「権利上の個人」と「事実上の個人」との溝は、個人の私的な問題としてではなく公的な問題として処理されなければならない。しかし、そのことを可能にする公共空間は、今や私的関心が投影されるだけの場と化しており、本来の機能を果たせない状態になっている。今日の批判理論の課題は、このような「私的なもの」による植民地化から公共空間を守ることであり、そうすることで、『権利上の個人』の現実と『事実上の個人』の可能性の間に開いてしまった深い裂け目の両端を、もう一度つなぎ合わせるということである」(Bauman 2001=2008: 152)。
- 2) ホネットが『資本主義の新たな精神』のいかなる点に依拠したかについては、上述の出口の議論が詳しい(出口 2010)。
- 3) たとえば、Molénat (2009) を参照。
- 4) これら二つの理論的潮流を指摘する際にボルタンスキーとテヴノーが具体的にどの社会学者を念頭に置いているのかに関する明確な言及はない。マルク・ジャックマンは、ボルタンスキー学派の理論が、「戦略という観点からの古典的分析(クロジエやフリードベルグ)、もしくは、場やハビトゥスという観点からの古典的分析(ブルデュー)と競合した」(Jacquemain 2001: 2)と述べている。ジャックマンのこの説明が正しいとすれば、社会関係を戦略という

観点から分析する功利主義に由来する社会学的理論とは、ミシェル・クロジエやエアハルト・フリードベルグのそれであると考えられるが、ここではこの点についてこれ以上の検討は行わない。

- 5) 「オーケストラ編制された行動」という表現は、ブルデューによるハビトゥスの定義の中にも見つけることができる。「ハビトゥスとは、持続性をもち移調が可能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造 (structures structurantes) として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造 (structures structurées) である。そこでは実践と表象とは、……集散的にオーケストラ編制されながらも、オーケストラ指揮者の組織行動の産物ではない」(Bourdieu 1980=1988: 83-84)。
- 6) ボルタンスキーは、力関係を強調するモデルや文化主義的モデルの他に、現象学的社会学やエスノメソドロジーにも言及しているが、ここではこれ以上の検討は行わない。
- 7) ただし、このことはボルタンスキーにとって不本意なものであるかもしれない。というのも、ボルタンスキーがブルデューを真正面から体系的に論じたのは、『批判について』が初めてだとしているからである。ボルタンスキーはあるインタビューで次のように述べている。「最初に言いたいのは、私はこの本(=『批判について』)の前にブルデューの批判を含むテキストを出版したことはありません。あなたが望むなら暗黙の批判はありましたが、しかしそれだけです」(Boltanski 2011a: 474)。
- 8) たとえば、『正当化の理論』の訳者である三浦直希による訳者解説や三浦(2011)が挙げられる。
- 9) この二つの能力の理解に関してはNachi(2006)に多くを負っている。
- 10) 文化主義的人類学以外の理論にも言及が見られる。たとえば、アーヴィング・ゴフマンやエスノメソドロジーのいくつかの仕事。共通の合理性を想定する、生物学を基礎にしたマイクロ経済学。繰り返される相互作用を基盤として生じる自動創発過程を強調する、コンヴェンションナリズムのいくつかのバージョン。間主観的關係を介した観点の収斂を主張する現象学的社会学。経験的現実であると同時に倫理的要請として扱われるコミュニケーションや討議である(Boltanski 2009: 89-90)。
- 11) ボルタンスキーとホネットを比較検討した研究として、他にマウロ・バサウレの議論がある(Basaure 2011)。
- 12) ここでは、『リヴァイアサン』の第14章「第一と第二の自然法について、および契約について」に該当するページ数が指示されているが、この章に関するボルタンスキーの言及がこれ以上ないため、本論文もこれ以上立ち入らな

い。

- ¹³⁾ ホッブズを基軸にしてボルタンスキーとホネットとの関係性をこのように表現するとき、我々は改めて、社会学者の視点を形成する上でのホッブズの重みに気づかされる。たとえば、ホッブズの自然状態のなかに功利主義の論理的帰結を見出だし、この問題に取り組む形で己の理論を確立しようとしたパーソンズにおいても、また、ホッブズやタルコット・パーソンズが自明としている「科学的合理性」と「行為の事実性」を問題化し、アルフレッド・シュッツに依拠しながら「対応説」と区別される「同一説」という対象の理論を構築することによって秩序問題を再定式化したハロルド・ガーフィンケルにおいても（浜 1992）、ホッブズが分析の出発点を形づくる上でどれだけ大きな役割を果たしていたのかを我々は思い出すことができる。

文 献

- Basauré, Mauro, 2011, "In the Epicenter of Politics: Axel Honneth's Theory of the Struggles for Recognition and Luc Boltanski and Laurent Thévenot's Moral and Political Sociology," *European Journal of Social Theory*, 14(3) : 263-281.
- Bauman, Zygmunt, 2001, *The Individualized Society*, Cambridge: Polity Press. (＝2008, 澤井敦・菅野博史・鈴木智之訳『個人化社会』青弓社。)
- Boltanski, Luc, 1990, *L'Amour et la justice comme compétences: Trois essais de sociologie de l'action*, Paris: Métailié.
- , 2008, "Institutions et critique sociale: Une approche pragmatique de la domination," *Tracés*, #08:17-43.
- , 2009, *De la critique: Précis de sociologie de l'émancipation*, Paris: Gallimard.
- , 2011a, "Critique sociale et émancipation: Entretien réalisé par Laurent Jeanpierre," Editions Amsterdam ed., *Penser à gauche: Figures de la pensée critique aujourd'hui*, Paris: Editions Amsterdam, 466-485.
- , 2011b, 三浦直希（訳）『偉大さのエコノミーと愛』文化科学高等研究院出版局。
- , 2013, "A Journey through French-style Critique," in Paul du Gay and Glenn Morgan eds., *New Spirits of Capitalism.2: Crises, Justifications, and Dynamics*, London: Oxford University Press, 43-59.
- Boltanski, Luc et Ève Chiapello, 1999, *Le nouvel esprit du capitalisme*, Paris:

- Gallimard. (= 2005, Gregory Elliott, trans., *The New Spirit of Capitalism*, London and New York: Verso.)
- Boltanski, Luc et Laurent Thévenot, 1991, *De la justification: Les économies de la grandeur*, Paris: Gallimard. (=2007, 三浦直希訳『正当化の理論——偉大さのエコノミー』新曜社.)
- , 2000, “The Reality of Moral Expectations: A Sociology of Situated Judgement,” *Philosophical Explorations*, 3(3) : 208–231.
- Bourdieu, Pierre, 1980, *Le sens pratique*, Paris: Éditions de Minuit. (=1991, 今村仁司・港道隆訳『実践感覚 1』みすず書房.)
- Bourdieu, Pierre et Jean-Claude Passeron, 1970, *La Reproduction: Éléments d'une théorie du système d'enseignement*, Paris: Éditions de Minuit. (=1991, 宮島喬訳『再生産——教育・社会・文化』藤原書店.)
- Corcuff, Philippe, 2006, *Les nouvelles sociologies: Entre le collectif et l'individuel*, Paris: Armand Colin.
- 出口剛司, 2010, 「アクセル・ホネットの承認論と批判理論の刷新——批判理論はネオリベラリズムの変革をどう批判するのか」『現代社会学理論研究』4: 16–28.
- Deranty, Jean-Philippe, 2009, *Beyond Communication: A Critical Study of Axel Honneth's Social Philosophy*, Boston: Brill.
- Duvoux, Nicolas, 2011, “Le pouvoir est de plus en plus savant: Entretien avec Luc Boltanski,” *La Vie des idées*, <http://www.laviedesidees.fr/Le-pouvoir-est-de-plus-en-plus.html> 2013年6月25日DL.
- 浜日出夫, 1992, 「現象学的社会学からエスノメソドロロジーへ」好井裕明編『エスノメソドロロジーの現実——せめぎあう〈生〉と〈常〉』世界思想社, 2–22.
- Hobbes, Thomas, 1651, *Leviathan, or The Matter, Forme, & Power of a Commonwealth Ecclesiasticall and Civill*, London: Andrew Crooke. (=1954, 水田洋訳『リヴァイアサン (一)』岩波書店.)
- Honneth, Axel, 1990, *Die zerrissene Welt des Sozialen: Sozialphilosophische Aufsätze*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1995, Charles W. Wright, trans., *The Fragmented World of the Social: Essays in Social and Political Philosophy*, Albany: State University of New York.)
- , 1992, *Kampf um Anerkennung: Zur moralischen Grammatik sozialer Konflikte*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2003, 山本啓・直江清隆訳『承認をめぐる闘争——社会的コンフリクトの道徳的文法』法政大学出版局.)
- , 2010, *Das Ich im Wir*, Berlin: Suhrkamp. (= 2012, Joseph Ganahl, trans.,

- The I in We: Studies in the Theory of Recognition*, Cambridge: Polity Press.)
- Jacquemain, Marc, 2001, “Les cités et les mondes de Luc Boltanski,” [http://orbi.ulg.ac.be/bitstream/2268/90443/1/Les% 20cités% 20et% 20les% 20mondes% 20de% 20Luc% 20Boltanski.pdf](http://orbi.ulg.ac.be/bitstream/2268/90443/1/Les%20cités%20et%20les%20mondes%20de%20Luc%20Boltanski.pdf) 2013 年 6 月 25 日 DL.
- 樫村愛子, 2006, 「『新しい資本主義の精神』の社会学的批判 (1)」『愛知大学文学論叢』134: 286-267.
- , 2007, 「『新しい資本主義の精神』の社会学的批判 (2)」『愛知大学文学論叢』135: 354-336.
- 三浦直希, 2011, 「リュック・ボルタンスキーと資本主義の変容——正当性とエコノミー」Boltanski, Luc 『偉大さのエコノミーと愛』文化科学高等研究院出版局, 223-251.
- Molénat, Xavier, 2009, “Luc Boltanski: Observateur de la société critique,” Xavier Molénat eds., *La sociologie: Histoire, idée, courants*, Paris: 210-220.
- Nachi, Mohamed, 2006, *Introduction à la sociologie pragmatique*, Paris: Cursus.
- Rennes, Juliette et Simon Susen, 2010, “La fragilité de la réalité: Entretien avec Luc Boltanski,” *Mouvements*, 64: 149-164.